

Chillingworth

— *The Scarlet Letter* の 悪 魔 —

重 松 卓 未

それゆえ、この民のために祈ってはならない。また彼らのために泣き、あるいはわ祈り求めてはならない。彼等がその災の時にわたしに呼ばわっても、わたしは彼らに聞くことをしないからだ。(エレミヤ書1—14)

人がその苦悩の極に於てすべてのヴェールを脱ぎ、天に祈り地に伏したとてそれが何になろう。多くの宗教家、多くの作家はその責めを負わねばならぬ。彼等をも含めた多くの信者はその点において誤まっている。そして信者をも含めた現代は神に対する認識を改ためねばならぬ。砂漠の中に生れたバイブルにヘレニックなものを求めてはならぬ。ひざまづいた時に、すべての己が罪が消滅するというセンチメンタリズムから去って行かねばならぬ。それは妄想以外の何物でもあり得ぬ。

メイフラワーに乗って新しい理想の世界を求めたピューリタン達は偉大であった。彼等には妥協がなかった。偉大な詩人ミルトンが

“

…adorn'd

With gay religions full of pomp and gold,

And devils to adorn for deities.” (*Paradise Lost* BK 1—381~372)

と失樂園の中で、はき出すように宗教の墮落をののしているが、メイフラワーの清教徒達はそれを実践した点においてより偉大であった。然し彼等の信仰と決心とが今私達がほめたたえるようなものであったろうか。誰もその点について不動の確信を持って判断を下すことは出来ない。真理は不変であ

り、人間の本質は変らぬ。だがその解釈は異なる。その事実を余りも多く歴史が私達に教えて来た。Time と Space は永遠に私達を支配している。

The Scarlet Letter を時間と空間を無視して批評することは出来ない。

Hawthorne の作品は彼が存在した時間と空間の中で眺められねばならぬ。その時始めて彼の全作品に対する不信の念は消える。彼は決して前進する作家ではない。彼は常にふり返っていた。「これでいいのだろうか、ここには何か誤があるのではあるまいか。」と常に彼は考えていたようだ。

The Scarlet Letter の序文 *The Custom House* の中で彼は告白している。現在の自己を彼は否定する。彼は過去のつながりと呪の延長の上に自己を位置づけようとしている。まるで彼は自己を失ってしまったようである。彼が fatalism の信奉者であり deternism の信者であると批評されるのは当然である。もっとも fatalism と deternism に関しては同一なものではないという論もあるが。

彼の序文にもかかわらず、この作品は彼にとっては勿論であるが不滅の作品である。彼の他の作品とはあらゆる点において異なっている。この作品の中で彼はそれまでの後退をしないで大きく前進しているという点はその成功の最大の理由であろう。

物語の展開は直に奇妙な所から始まっている。不義姦通の子を抱いて現われて来る Hester を待つ人々のくすんだ服ととんがり帽子、そして釘のいっばいうちつけてある牢獄の扉がまづ最初に私達をこの物語にさそいこむ。

アメリカ文学の初期ロマンティシズムの中で Hawthorne と Poe とは同一カテゴリーとして取扱かわれる。それは彼等が共通して何か神秘的なもの、人間の理性では判断のつかない題材を取り上げたからである。そしてそれは childish という言葉だけで説明される事は不可能である。それは時間と空間の支配の下にあって、現代の私達にはその題材のおろかさを笑うことは許されない。今私達があえて批評することを許されるのは今なお人の魂をゆさぶる不変なもの——換言すれば生きた人間の苦悩が呼びおこす sympathy である。それは時間と空間の支配をのがれた不変の人間の魂のつぶやきであ

る。mortal な人間が互に感じあう sympathy である。そこには社会道徳律も正義の観念もそして神でさえ入る事を許されない。同じような題材を取扱いながら Poe と彼とは全ったく違った作品を作りあげた。一言にしていえば Poe は意欲的に自己の世界を創りあげて行った。華々しい評論と鋭い、妥協を許さぬ数々の詩はすさまじいものがある。

Hawthorne は常にひかえ目である。彼は常に躊躇し逡巡する。彼にはどうしても長篇が書けなかった。然しながら友人に進められて気のすすまぬ状態でありながら書きあげたこの *The Scarlet Letter* は素晴らしい。

この物語が私達をひきつける一つの原因、それは最高のもとは云えないかも知れないが、それは読者に imagination を強要する事である。牧師の Dimmesdale と Hester の関係はすでに終わっていた。しかもその終りからこの物語は始まっている。いってみればシンデレラが王女になってからの物語である。それ以前の事に関しては story の展開の中に暗示されているにすぎない。

彼の作品に対する批評は ambiguous なものが多くあるという点で一致している。ambiguous であるという彼の欠点は又同時にそれなるが故にすぐれた効果を發揮する。彼が意欲的であればそれはプラスである。そして消極的な場合にはマイナスである。「緋文字」においてはその ambiguous な点が最高に効果を發揮している。牧師 Dimmesdale は望まずして愛を得た。そして Hester は望むべきでない愛を得た。現代であるならばそれはメロドラマに終るかも知れない。だが Hawthorne の受けていた Time and Space の下では全ったく異なっていた。彼の住んでいた世界は今日の私達のそれとは異なっていた。その時代のピューリタンにとっては自我を殺し神の教理に従うことが常とされていた。要するに彼等の社会道徳律に従順であることが当然のこととされていた。人間の宿命は甘んじて受けねばならなかった。それを破って人間性を表わすことは悪であった。

その故に不義の子を生んだ Hester は生涯を Adalty の頭文字 Aをつけて、悪の標本として生きなければならなかった。彼女が世間の非難を一身に集

め、しかも姦通の相手の名前を深く心にとざしてもらさず、敢然として世評にたちわかってその幼児を育てあげた——その彼女の努力はすべて無視されたというよりも作者は明らかに読者に呼びかけているのではあるまいか。

牧師の **Dimmesdale** は己が犯した罪におののきながら **Hester** に向かって説得する“…

If thou feelest it to be for thy soul's peace, and that thy earthly punishment will thereby be made more effectual to salvation, I charge thee to speak out the name of thy fellow-sinner and fellow-sufferer! Be not silent from any mistaken pity and tenderness for him …” (*The Scarlet Letter* III *The Recognition*)

牧師のこの言葉を発した時の心境をありのままに感じることは不可能である。おそらく牧師の心にあったものは愛と悲しみとそして己が聖職の責であろう。この言葉を正確に日本語に直すことは私にとっては不可能である。

時間と空間というものは絶対であると私は信じる。しかしそれをも越して受け取り得るものがあると私は記述した。それは **sympathy** である。牧師のこの説教は果してその **sympathy** を私達に与えるであろうか。私達の魂をその根底からゆさぶるような言葉であろうか。己が罪にふるえおののき救を求める者の言葉であろうか。私は敢て「違う」と云う。それでは牧師がその罪を逃避した言葉であると云えようか。それに対する答は同じく“**No!**”である。それは **Time and Space** のもたらした結果である。牧師が罪人であることを自白すればそれはとりもなおさず不信と混乱をボストンに生じる。その意味で彼も又自己を殺し生ける屍となろうと決心したのであった。社会道徳律のために牧師 **Dimmesdale** は生ある自殺をはかり、彼の心を知り又同時に愛のために **Hester** もその生涯をささげる決心をしたのではあるがこの **Hester** には時間空間を越えたもう一つのもの——即ち二人の間に生れたパールの母親であるという、理性以前の本能的なものがあることは否めない。

Spiller はこの **Dimmesdale** と **Hester** について「彼等は生きている。」と批評した。そしてこの二人がピクチャーでなく苦しみ生活する存在である

から「緋文字」は成功したと言及している。

然し所詮人間は人間である。このストーリーの始まりは二人の人間性の肯定の上に始まった。今この二人がその人間性を否定し、何にせよ理念で生きぬこうとするには余りにも断層がありすぎる。彼等が生きた人間であると認められるには一つの決定的要素が必要である。それは彼等を純粋な殉教徒的観念にしがみつく事を許さず「生の苦しみ」に追やる存在が必要である。それは物語の中では悪魔的役割をはたさねばなるまいが作者にとっては最高の役割を果たすものである。

Chillingworth はこの物語の中で主人公の二人を「生きた存在」にする最高のキャラクターであると考えられる。

悪魔という言葉はすぐに Milton の「失樂園」を連想させ、同時に Goethe の「ファウスト」を思い出させる。そして又 Shakespeare の「マクベス」(尤もこれは魔女であるが)のそれもある。

Paradise Lost の中で邪神を集めて説く Satan の言葉は不思議な迫力を持って私達に迫って来る。Milton の究極の目標は神の栄光をたたえるものであったにせよ、彼はその過程において Satan を愛した。悪魔の中に苦悩する人間を発見し、そしてその苦悩をこよなく愛する自己を発見しては驚き、反省しては又筆を取った。

Chillingworth が獄舎に Hester を訪ねそして Pearl を救い、彼女をも助ける。彼女に薬をさし出し、ためらう彼女に彼は云う。

“Drink, then,” replied he,...

“Dost thou know me so little, Hester Prynne? Are my purposes wont to be so shallow? Even if I imagine a scheme of vengeance, what could I do better for my object than let thee live, — than to give thee medicines against all harm and peril of life, — so that this burning shame may still blaze upon thy bosom?” (*The Scarlet Letter* IV *The Interview*)

要するに Chillingworth が Hester に求めたのは死のもたらす解放ではない。不義の子を殺し己を裏切った妻を殺すことではなかった。そうではなく

て彼は彼女がより長く生き、より長くその屈辱の日を送ることを望んだ。彼は医師として容易に不義の妻を殺すことが出来た。然し彼はあえてそれをしなかった。これ程すさまじい **revenge** があるのか。彼は復讐の鬼となった。彼は博学知識な男として読者に紹介されている。 **Hester** を殺す事は容易であった。だがそれは彼女を永遠に社会道徳律を越えた「真実の愛」の中にくぎづけすることになる。 **Hester** を生かしておく事が、とりもなおさず最大の復讐である。生れた子供に関する事、神と社会を裏切った事、そしてそれにもまして自己に課せられた秘密——それはもしも自己を失ってしまえば他にもれてしまう——一言にしていえば自己に対する葛藤である。

Chillingworth は冷やかにその計画をたてた。 **Hester** の中にある罪におののく魂の苦しみを彼は計算したのである。そして彼は彼女に自分が本当の夫である事を秘密にさせる。

“Swear it!” (誓え) と彼は云う。 **Hester** がその理由をたずね「私の魂を滅ぼすためか」と聞いた時、彼は “Not thy soul,”…“No, not thine!” と答える。 (*The Scarlet Letter* IV *The Interview*)

Chillingworth の意図は明白である。 **Hester** がその愛をささげた相手の魂を悪魔にうることであった。そして彼はその相手——それは **Chillingworth** が望んでも得られぬ愛を、望まずして得た男である。

かくの如き **Chillingworth** の出現とその言葉とその予想される行動は **Hester** にとって恐ろしい衝動を与えた。だがその故に **Hester** は自己を発見したのではなからうか。 **Chillingworth** の出現によって彼女は自己の存在する意義を発見した。表面的な社会道徳律を無視するという段階に達しなくても、少なくともそれにしぼられる恐怖から脱却し、生きぬこうという人間の不変の本質をとりもどし、母としての責任を反省し、「真実の愛」を破ろうとする悪魔に対する静かではあるが不屈な存在——いってみれば真の人間になり得たのではあるまいか。 **Spiller** の批評が正しいとするならば、彼女を「生きた」人物としたのは実にこの **Chillingworth** である。

かくて Hester の口をふうじた Chillingworth は牧師に接近する。いくばくかの説明があるにしても、この牧師も老医師も、そして彼らは何故に接近して行ったかは真に *ambiguous* である。そういった観点から見れば Hester を Chillingworth が診察し投薬した過程も同じであって、その点を容認するか *ambiguous* であるときめつけるかによって異質の評論が生じて来る。

然し今仮に何らかの *accident* で牧師と医者をつなげたとしてもストーリー全体として不自然である事には変りはない。私自身は牧師 Dimmesdale と老医師とをつなげた、あの濃霧のような説明が好きである。Hawthorne でなければ書けないような文章である。

この若い牧師と老いた医者とは共に同居する。牧師の健康は日一日とおとろえて行く。ある日牧師と医者は「人間」について話し合う。

“Yet some men bury their secrets thus,” observed the clam physician……

“True; there are such men,” answered Mr. Dimmesdale.

“... Or, — can we not suppose it? — guilty as they may, retaining, nevertheless, a zeal for God’s glory and man’s welfare, they may shrink from displaying themselves black and filthy in the view of men; because, thenceforward, no good can be achieved by them, ...” (*The Scarlet Letter* X *The Leech and his Patient*)

(こうも考えられないでしょうか。何か罪をおかしていても、神の栄光や人間の福祉を切実に思っていて人々の前に自分の黒い汚れた面をさらす事をしりごみしているのだと。何故ならそんな事をすれば善が行なえないからです。)

若い牧師 Dimmesdale はこの言葉の中に自分の考をはっきりと表現した。自分が不義を働いて子供を産んだ Hester に向って、死ぬる思いで彼女にその姦通の相手を告白するように説いた時、彼は愛と苦しみを乗り越えた自己の義務——それは今自分のした罪をつぐなうより多くの善行と救を人々に与えよう——それによって多くの人々が救われ、それにもまして社会秩序の混乱の防止を決心していた。そしてそれは彼という個人の人間性の抹殺を

意味するのである。生ける屍となって神の道の伝道者たらんとしたのである。

もう一度彼の生きていた時間と空間にもどって考えよう。それは責めるべきものであろうか、又は当然牧師として取るべき態度であらうか。彼一人が生きながらにして地獄の火にやかれ、然もその反面数多くの人々の若悩を解決してやるという事が絶対許すべからざる行為であらうか。

若き牧師 **Dimmesdale** はその肌着に **A** のイニシャルをつけそして後者の行為をしようとした。それは非愴な決意である。他の面から眺めれば牧師 **Dimmesdale** はある意味での殉教者になろうと決心したのである。それは拷問にかけられることもない、火で焼かれることもないが生きとし生きる限りの苦悩である。一瞬のやすらぎも、一刻のよろこびも許されない生きながらの地獄である。

若き牧師はオックスフォードの古い名誉を負い、ニューワールドに新らしく神の領域をひろめる義務があった。新世界の人々は彼によって神の威光がより高くなることを望みそして期待していた。

こういった事情を考え合わせる時、彼のとるであらう道は二者選択ではない——只一つに限定される。そしてそれは許すことの出来ない神に対する冒瀆であり、自己満足以外の何者でもない。

若き牧師の考えた道は自己にとって都合のいい合理化である。そして **Hester** の取ろうと決心した道もそれ以外の何者でもない。

勝利にその頬を輝かす人々の行列——それは選挙であらうが戦のもたらしたものであろうが同一である——その中に牧師は参列していた。そして彼は長い長い間の自己に対する戦をふと止めた。 **Hester** と **Pearl** をそして彼女の胸についている **Scarlet Letter** を見た時、彼はその両腕をさしのべて叫ぶ。

“Hester,” said he, “come hither! Come, my little Pearl!” It was a ghastly look with which he regarded them; but there was something at once tender and strangely triumphant in it. (*The Scarlet Letter* XX III

The Revelation of The Scarlet Letter)

（“ヘスタ、こちらに来なさい。パールちゃん、いらっしやい。”と彼は云った。彼の顔には一種異様な表情があったが聞く人の心をなごませそして奇妙な勝利のひびきがあった。）

この瞬間に彼等は生命のある存在となった。彼等は神も社会道徳律も放棄し **mortal** な人間としての叫びをあげた。この時まで彼等の実在をかくしこの劇的効果をあげ得た作家 **Hamthorne** の偉大さを私達はたえねばなるまい。彼は「人間」の勝利を誇示する。

Hester は尚ためらい、ちゅうちょする。が今初めて彼の探し求めていたものを確認した牧師はその母娘を共に処刑台の上に立たせる。

Chillingworth はあわてて彼等を止めようとする。“…**Would you bring infamy on your sacred profession?**”（お前はその神聖な牧師の職をけがすのか）

それに対して牧師は答える。

“**Ha, tempter! Methinks thou art too late! …They power is not what it was! With God’s help, I shall escape thee now!**” (*ibid*)

（はは、悪魔よ。思うにお前はおそすぎた。お前の力は昔の力を持っていない。神のめぐみによって私は今お前からのがれる。）

この **story** のこの頁が読者をその心底からうつ。

Emerson のように彼は人間の延長の上に神を発見することは出来なかった。神と人間とは厳として区別すべきものであった。苦しみ抜いた牧師 **Dimmesdale** は「神の助け」によって始めて人間性をとり戻した。彼自身の努力と意志によって求が得られたわけではない。彼が **Hester** とその不義の娘 **Pearl** にみまもれながら **Hester** が最後に云った言葉 “**Shall we meet again?**”（又私達は会うことができるのでしょうか）に対して彼は否定する。勿論それは死後の世界であり、牧師といえども見る事は許されない世界であるが、彼ははっきりと否定する。そして彼の負った苦悩の日々が彼を救ってくれたと云う。神と人間の間には断層がある。

彼がその生ける屍となる事を決心してくらし日々が彼にとっては救いで

あった。

“...when we forgot our God, —when we violated our reverence each for other’s soul,” (*ibid*) (私達が私達の神を忘れた時、私達がお互の魂の尊敬を失った時) 彼等にとって再び幸福の日が来ないことを彼等は確認していた。そして、“God knows; and He is merciful! He hath proved his mercy, most of all in my afflictions. By giving me this burning torture to bear upon my breast! By sending youder dark and terrible old man, to keep the torture always at red-heat!...” (*ibid.*)

「かの陰険なおそろしい老人」は神の慈悲によって牧師につかわされたものである。神の慈悲はこの最後の告白によってすべてを清算し、すべてを祝福につつま、目もあやな劇的效果をもたらす奇蹟ではなかった。それは牧師を真の人間にもどらせて人々に教訓を与えた。ドラマテックなエネルギーな解決は否定される。それは華麗なるものではないが清らかな然も厳粛な結末である。

Chillingworth はその務めを終えてしまった。この博学多才な老悪魔は己が全身全霊をかたむけた仕事をなしとげてしまった。この小説の Conclusion の中で Hawthorne が明示している通り雑草が根をたたれて太陽の下にさらされた如くしなび消滅してしまう。この段階に於て私達は初めて知らされる。彼は実は悪魔ではなかったのだ。完全なる人間以外の何者でもなかった。メフィストフィルスでもなければ、Milton のえがいた Satan でもなかった。彼は牧師の魂をすくい、そして又 Hester の魂をも救った偉大な存在である。

“It is a curious subject of observation and inquiry, whether hatred and love be not the samething at bottom. (*The Scarlet Letter Conclusion*) (それは興味深く考慮し探研すべき問題である。即ち憎しみと愛とはその根底において同一ではなかるうか。) こう云った表現が Hawthorne 独特のものであって非常にすぐれた面を表現すると同時に又彼のもろさというか ambiguous であるという批評の対称にされる。

Chillingworth はその遺言状の中で渾大な遺産を Pearl に送った。生きて

行く意義を失くしてしまった老人が最後の意志をふりしぼって妻 **Hester** の不義の子にあてて遺産を送る遺言状を書く場面は想像するだけでも鬼気迫るようなものがある。

Chillingworth はこの全篇を通じての **pivot** である。然も彼は悪魔でもなく、又 **Hawthorne** の云うようなその仕事を主人の悪魔から命令されねばならない地獄の存在でもなく、人間そのものである。

Chillingworth の存在によって牧師 **Dimmesdale** は救われ、**Hester** も、そして **Pearl** の一生も保証された。そしてその事実を通じてこの小説全体を成功させた。すべてが抽象的な存在ではなく生命を持った完全な人間をえがき出した **device** は彼 **Chillingworth** であった。

だが今ここに一つの疑問が残る。この「結末」は必要だったのだろうか。**Conclusion** の中で **Chillingworth** を説明し **Hester** と **Pearl** の必福な生活を事細やかに記述する必要があるだろうか。**Hawthorne** にとってはこの部分を欠く事は出来なかったであろう。彼は常に躊躇し自信がなかった。

然し自信のない事が才能の欠亡を意味するのではない。それは人間に対する誠意を意味する場合もある。*The Custom House* もそして **Conclusion** も *The Scarlet Letter* に必要であったろうか。それは疑わしい。牧師と **Hester** が救われた時にこそこの物語は結末をつけるべきではなかったろうか。物語の初めの如くその結末も又読者の **imagination** にゆだねるべきでなかったろうか。その点において **Poe** が **prose** の目的は詩の目的と異っている点を指摘し **Hawthorne** の偉大さはその散文の目的である **truth** を目標としその面から批判されるべきものであるという論は正しい。これは詩ではない。あくまでも **fiction** である。詩の世界におけると同じ **imagination** の働きを求める事は許されないであろう。

作家精神に妥協は許されない。それはたとえ一つの童話を書く時でも許されない。即ち飽くことない探求が課せられる。一言にして云えば躊躇があってはならないのである。

Chillingworth はその行為において悪魔であったが結果に於て罪になやむ

人々を救った。そしてその判断は読者にまかされるべきものではなかったろうか。

Chillingworth を追求し解明する過程において私達は Hawthorne の持つ一つの限界を発見する。それは Hawthorne が持つ豊かな人間性であり又それが同時に作家としての彼の発展を阻止したのであった。

Chillingworth はやはり人を呪う悪魔であったのだろうか、Hawthorne を苦しめた悪魔という点で。

参 考 文 献

A Scarlet Letter Handbook ed. by Seymour L. Gross

(San Francisco Wodsworth Publishing Company 1961)

1) *Chillingwoith as Miltonic Sasan* by Darrel Abel

2) *Chillingworth as Faust and Mephistopheles* by W. S. Stein)

The Cycle of American Literature by R. E. Spiller

(Pennsylvania Macmillan Company 1955)

The American Tradition in Literature ed. by S. Bradley

(New York W. W. Norton & Company Inc. 1962)

Hawthorne's View of the Artist by M. Bell

(State University of New York 1962)

Hawthorne's Determism by P. L. Thorlev, Jr.

(Nineteenth Century Fiction September 1964 University of California Press)